様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　３月　３１日現在

研究種目：基盤研究（B）　海外
研究期間：2007　～　2010
課題番号：19401015
研究課題名（和文）アジアの無形文化における仮頭の研究－仮面との比較から－
研究課題名（英文）　A Study of “KATō(alterntive head)” in the Asian Intangible Culture: In Comparison with the Masks

研究代表者
細井　尚子（HOSOI　NAOKO）
立教大学・異文化コミュニケーション学部・教授
研究者番号：40219184

研究代表者の専門分野：演劇学
科研費の分科・細目：　哲学・美学・美術史
キーワード：仮面・仮頭・アジア・身体表現・芸能・民俗・祭礼・儀式

１．研究計画の概要

本研究課題は、学問のほぼ全領域から研究対象とされた仮面研究が内包する死角であった仮頭について、仮面との比較という方法によって、その属性を明らかにするのを目的とする。動態としての仮頭を主たる対象にするため、現在も仮頭の身体表現が存在するアジアに範囲を限定し、仮頭と仮面を１つの芸態にもつもの、あるいは１つの文化圏で両者をもつものを対象に、フィールドワークによる以下の基礎資料作成と、メンバー個々の分担テーマに基づく資料分析、検討、メンバー全員での情報共有、比較研究を実施している。

本研究課題で収集している基礎資料データの内容：

(1)仮頭自体
仮頭の計測、造型の特性、材質、作成法など。

(2)成立要素関連
身体表現方法、音楽、式次第・内容、提供側組織、養成・伝承システム、受要側の質などを調査対象として聞き取り調査を実施。仮頭を用いる芸態の映像記録の作成。

(3)社会的背景関連
その芸態を受容する社会、その芸態の社会的機能、歴史的背景などを対象に、文献及び聞き取り調査を実施。

２．研究の進捗状況

研究計画に従い、初年度は研究会２回、海外調査１回（インド・ケーララ州、対象：クンマティー、プリカリ）、国内調査 3 回（宮古市２回　対象：パーントゥ・奈良県桜井市埋蔵文化センター　発掘された仮面調査）、第２年度は研究会２回、海外調査１回（ブータン・トンサゾン、対象：ツェチュ）、国内調査１回（四天王寺舞楽大法要）、第 3 年度である今年度は研究会２回、海外調査２回（モンゴル、ブータン　対象：チベット仏教のチャム）、国内調査１回（民博　チベット仏教・ポン教関連資料）、及び中間成果報告として国際シンポジウム（1 月 16, 17 日　於立教大学）を行った。

研究会では、前年度に収集した資料の整理状況報告、当該年度研究活動計画等についての検討、各自の分担テーマの進捗状況を中間成果報告で発表し意見交換をするという３種を主たる内容として実施した。

国内調査、海外調査はメンバーの所属機関が複数であるため、調査期間により参加メンバー人数・参加者が異なるが、共同作業である基本資料の収集は、海外調査ではすべて実施した。

仮頭の基礎資料が蓄積されるに伴い、「仮頭」の造形上の定義に修正を加え、またその属性についても、まだ仮説の段階ではあるが、一応まとめられたため、中間成果報告として三菱財団、国際交流基金、立教大学の助成を得て、本研究課題の立教大学を所属先とするメンバー全員が所属する立教大学アジア地域研究所主催、早大演劇博物館演劇映像学連携研究拠点共催で国際シンポジウムを開催した。国際シンポジウムでは、広く一般の方々にも成果を公開するため、ブータン、モンゴルよりチベット仏教チャムの実演者（僧侶）を招き、レクチャー&デモンストレーションのプログラムを加え、120 名の参加者を得た。

また、このシンポジウムを機縁に新たな研究者間のネットワーク、ブータンとの共同研究構想が生まれた。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
第２年度（中国チベット族自治区が当初予定)、第 3 年度（タイまたはスリランカが当初予定地）ともに、前年度の研究成果から想定した海外調査地が政情不安定のために変更を余儀なくされたため、仮頭の属性として抽出されてきた宗教性の限定ができなかった。
しかし、代替として選定した調査地（ブータン、モンゴル）により、当初想定外であった収穫も得られた。すなわち、仮頭を用いる芸態（仏教系）が国家鎮護の機能をもつ点、日本における伎楽及び仏教に共通点が見出せる点など。これらから、仮頭の属性にある宗教性から進んで、その社会における機能、特に国家鎮護、呪術的側面についての視点を得た。
また、仮面がもつ仮装性に対し、仮頭にはそれが著しく低く、頭の挿げ替え、すなわち存在自体の入れ替わり機能が主たるものではないかという想定を得た。
従って、当初の計画にあった宗教性の限定（より具体的には上座部仏教、大乗仏教、密教系による仮頭の属性の相違など）はまだ十分ではないが、新たな視点、成果を得たと考えている。

４．今後の研究の推進方策
最終年度である今年度は、3 年間の研究活動の成果をまとめること、またそれを基礎に研究課題の目的を果たす。
まず中間成果報告であった国際シンポジウムの成果を報告集としてまとめ、収集した基礎資料の整理、分析、データベース化を進める。
仮説として一応のまとまった仮頭の属性、機能に関する関連資料を収集、分析、検討し、その裏づけを行い、アジアにおける仮頭についての成果をまとめる。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１５件）
① 山本宏子「ブータンのチベット仏教チャムにおける太鼓の象徴と機能」『国際シンポジウム「日本伎楽とチベット仏教チャムの比較研究－仮頭に注目して－」』予稿集 2010 年pp. 42-57
② 細井尚子「中国仮面劇の諸相」『早大演劇博物館グローバルCOE紀要演劇映像学2008』別冊報告集 2009 年pp. 3-12
③ 竹本幹夫「散楽と仮面」『早大演劇博物館グローバルCOE紀要演劇映像学2008』別冊報告集 2009 年pp. 3-12

〔学会発表〕（計２５　件）
① 細井尚子「仮頭を用いるアジアの諸芸態－日本の伎楽を起点に－」(基調講演）国際シンポジウム「日本伎楽とチベット仏教チャムの比較研究－仮頭に注目して－」2010 年 1 月 17 日立教大学
② 竹本幹夫「中世芸能面の仮頭性」国際シンポジウム「日本伎楽とチベット仏教チャムの比較研究－仮頭に注目して－」2010 年 1 月 17 日立教大学

〔図書〕（計１　件）